

日本語の後置文：左方移動文との相違

綿貫啓子

神田外語大学CLS/ シャープ (株)

日本語の後置文の統語構造や派生について、本論では、スクランプリングを含む左方移動文と後置文との相違を中心に議論する。従来の分析は、後置される要素が名詞句を主な分析対象としてきたが、本稿ではまず、名詞句のほか、後置詞句や副詞などが後置されるデータを考察する。次に、Merchant (2004)での英語の Fragment の分析を援用し、語用の観点も視野に入れた分析を試みる。その上で、日本語の後置文は2つの文から構成され、右方に移動しているように見る要素は文の一部(断片)であること、また、この断片と先行する文とが解釈の段階であたかも新しい一つの文(主文)として振る舞うことを論じる。

1. はじめに

日本語の基本語順は動詞が文末に現れるとされるが、話し言葉においては、(1)に示すように、動詞の後に名詞句や後置詞句、副詞などが現れることが少なくない。

- (1) a. とうとう僕も買ったよ、パソコン。
b. 昨日転んじゃったのよ、階段で。
c. 眺めがいいねえ、とつても。

このような文は後置文、あるいは倒置文、右方転移文などと呼ばれ、その統語構造や派生について、i) 2つの文から構成されていて、一方の文

の一部が削除されている、ii) 右方向への移動が関与している、iii) 左方向への移動が関与している、という主に3つの分析が議論されてきた (Haraguchi 1973, 井上 1978, 久野 1978, Simon 1989, Endo 1996, Abe 1999, Tanaka 2001, 黒木 2005 など)。しかしながら、従来の分析は、後置される要素が名詞句を主な分析対象としてきた。

本稿ではまず、左方移動文との相違についてデータを考察し、次に、語用の観点も視野に入れた分析を試みる。その上で、日本語の後置文は2つの文から構成され、右方に移動しているように見る要素は文の一部(断片)であること、また、この断片と先行する文とが解釈の段階であたかも新しい一つの文(主文)として振る舞うことを論じる。なお、本稿では、後置文の文頭から動詞までの前半部分を前置要素、後置された後半部分を後置要素と呼ぶこととする。

2. 左方移動文との相違

まず、後置文が左方移動文とは異なる振る舞いをすることを、データを基に示す。

2.1 修飾語句

左方移動文である(2b)(3b)は(2a)(3a)の名詞の修飾語だけが左方向に移動して非文となっており、また、(4b)(5b)は(4a)(5a)の複合名詞句からの左方向への取り出しにより非文となるが、同じ要素が右方向に移動しているように見える(2-5c)は文法的である。

- (2) a. タベ 駅前で 山田君の自転車が盗まれたんだ。
b. *山田君の タベ 駅前で 自転車が盗まれたんだ。
c. タベ 駅前で 自転車が盗まれたんだ、山田君の。
- (3) a. 向こうに 真っ赤な 屋根が見えるよね。
b. *真っ赤な 向こうに 屋根が見えるよね。
c. 向こうに 屋根が見えるよね、真っ赤な。

- (4) a. 太郎は 花子が日本に戻ってくるという 噂を信じてるよ。
 b. *花子が日本に戻ってくるという 太郎は 噂を信じてるよ。
 c. 太郎は 噂を信じてるよ、花子が日本に戻ってくるという。
- (5) a. 太郎が 花子がディスプレイを買った パソコンショップを知ってるよ。
 b. *花子がディスプレイを買った 太郎がパソコンショップを知ってるよ。
 c. (?)太郎がパソコンショップを知ってるよ、花子がディスプレイを買った。

2.2 副詞

(6b)と(6c)では、副詞「理由もなく」の修飾する作用域が異なる。(6b)では、「理由もなく」は「信じていた」を修飾する解釈が強いものの、「会社を辞めた」を修飾する解釈も可能である。一方、(6c)では、「信じていた」を修飾する解釈のみが可能である。

- (6) a. 僕は太郎が理由もなく会社を辞めたと信じていたよ。
 b. 理由もなく 僕は太郎が会社を辞めたと信じていたよ。
 c. *僕は太郎が会社を辞めたと信じていたよ、理由もなく。

(cf. Tanaka 2001)

2.3 残余代名詞

左方移動文である(7b)は残余代名詞を許さず、非文であるが、右方向に移動しているように見える(7c)は残余代名詞を許す。

- (7) a. 太郎が花子を殴ったんだ。
 b. *花子を_i、太郎が彼女を_j殴ったんだ。(cf. Saito 1985)
 c. 太郎が彼女を_i、殴ったんだ、花子を_j。

3. 提案

3.1 日本語の後置文の特徴

前章で日本語の後置文は左方移動文とは異なる振る舞いをすることを観察した。ここで、後置文の特徴を確認してみる。

まず、(8)に示すように、意味的に、後置要素が前置要素の一部としての機能を持つ。

(8) a. たった今、お車が到着しましたよ、山田先生の。

(Honorification の一致)

b. 田中先生が初めて怒ったよ、学生たちを。

(格の一致)

c. 教室で倒れたんだ、太郎が。

(意味役割の一致)

これらの事実が、後置文に何らかの削除、あるいは移動が関わっているという分析の動機付けになっている。一方、後置文は上記(7c)に示したように残余代名詞を許し、これは移動の関与を否定するものである。

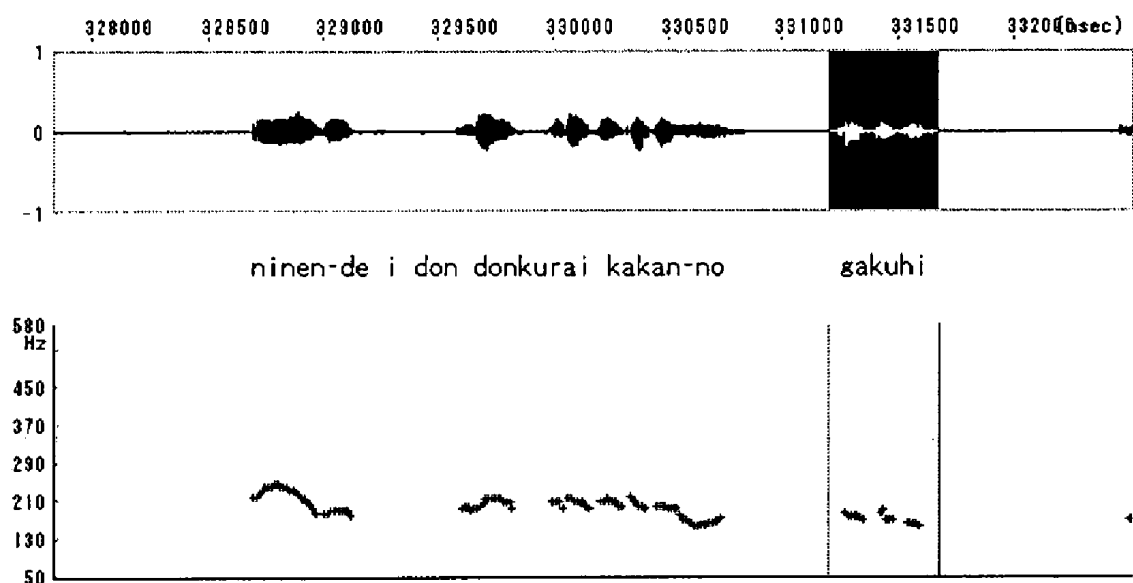
ところで、従来研究における考察は統語上の特徴を中心とした分析であった。そこで、本稿では、後置文をこれまでとは異なった観点、すなわち、後置文の持つ韻律的特徴や語用的機能と、後置文が主文にのみ見られる現象であることとの関わりで考察してみる。

まず、後置文には、興味深い韻律的特徴が見られる。下記に対話の実データ¹の韻律（上図：波形；下図：ピッチ）を示す。

¹ RWC 研究用マルチモーダル対話データベース(MMDB)から引用。

(9) a. 二年でどのくらい掛かるの[↑]学費。

b.



通常の話順の疑問文では文末に上昇イントネーションが生起する。しかし、疑問の後置文である(9)は、前置要素末で上昇イントネーションが生起し、続く後置要素は下降イントネーションで発音されている。このことは、前置要素と後置要素の間に文末に見られる韻律が存在することを示しており、韻律的には2つの要素は別々の文要素であることを示唆している。

さらに、語用的に見てみると、後置文の前置要素の末尾には、「しまったんだ」、「ぞ」、「よ」などの話者のモーダル要素を伴う傾向があり、そうした要素のない(10a)の容認度はかなり落ちる。

(10)a.?*僕は殴った、花子を。

b.僕は殴ってしまったんだ、花子を。(cf. 高見 1998)

このことは、前置要素の内容に対する話者の判断や観察が強調されることを示しており、後置文は、話者がまず言いたい内容を発話し、その発話に関係のある要素が後ろに付加した結果と考えられる(綿貫 2006)。

以上、日本語の後置文の特徴を見てきたが、後置文は、前置要素の一部が後置要素として移動しているように見えるものの、韻律的・語用的

には、後置文が必ずしも一文であるという仮定は成り立たず、むしろ、2文(S1,S2)から成り立ち、S2に相当する後置要素は、文の一部(断片)であって、かつ、S1に相当する前置要素と関係のある要素である、との分析が可能であることが示唆される(cf. 久野 1978, Tanaka 2001)。

このような特徴を持つ日本語の後置文を、本稿では、次の例文(11)(12)に見られるような英語の Short Answer について、これを Fragment (文の一部(断片))として分析している Merchant (2004)を援用し、語用的観点を視野に入れた分析を試みる。

3.2 Merchant (2004)

Merchant (2004)では、以下の(a)例文を Fragment としている。

(11)Q: Who did she see?

- a. John / Him.
- b. She saw John.

(12)Q: When did he leave?

- a. After the movie ended.
- b. He left after the movie ended.

Fragment の特徴は、まず、意味的には文全体であるにもかかわらず、文の一部が取り出されていることである。

また、Fragment には、Fragment とそれが文であった場合との間に connectivity effect が見られる。(13)はロシア語の例で、格の一致による、(14)は Binding theory に関する connectivity effect を示す。

(13)Q: Komu pomogla Anna? (Merchant 2004)

Who-DAT helped Anna

'Who did Anna help?'

- a. Ivanu / *Ivan/ *Ivana

Ivan-DAT/ Ivan-NOM/ Ivan-ACC

(14)Q: Where is *he_i* staying? (ibid)

- a. *In John's apartment.
- b. **He_i* is staying in John's apartment.

さらに、Fragment には(15)に示すように島の制約が見られる。

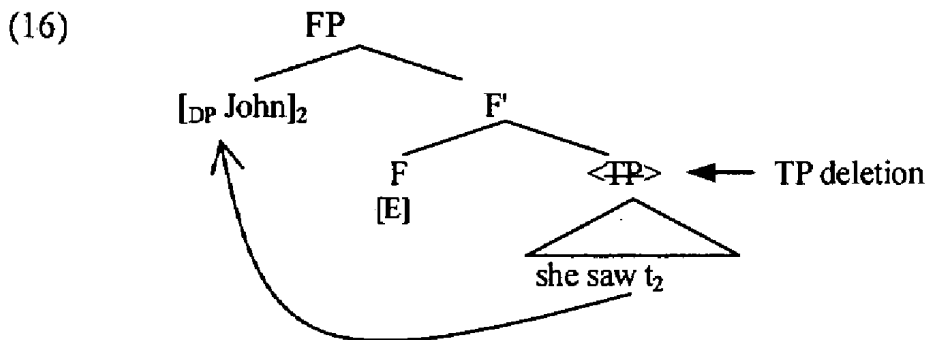
(15)Q: Does Abby speak the same Balkan language that *Ben* speaks?

- a. *No, *Charlie*.
- b. No, she speaks the same Balkan language that *Charlie* speaks.

以上の特徴から、Merchant (2004)は、Fragment は元々文であったものから、移動と削除により派生したものであると捉え、(11a)に対して(16)を提案している。

(11)Q: Who did she see?

- a. John./ *Him*.
- b. She saw John.



この派生において、Fragment DP の *John* が機能範疇 FP の主要部に位置する[E]素性²により機能範疇 FP の指定部に移動し、補部である TP 句が前出の先行文との構造的・意味的平行性を満たすことから削除される。

² Merchant (2004)の Fragment における[E]素性とは、TP を補部とし、TP が e-GIVEN であるときのみ、TP を削除する。e-GIVEN とは、意味的に平行な antecedent を持つこと (Merchant (2001))。すなわち、構造的に同一な antecedent が存在しなくても TP 削除が可能である。

3.3 日本語の後置文の分析

3.1 節で見たように、日本語の後置文は 2 文(S1,S2)から成り立ち、S2 に相当する後置要素は文の一部(断片)であって、かつ、S1 に相当する前置要素と関係のある要素である、との分析が可能である。一方、英語の Fragment も、文であった場合との間に connectivity effect が見られ、元々文であったものと捉えられる点で類似していると言えよう³。

そこで、Merchant (2004)の分析を援用し、後置文(17)を(18)のように分析する。

(17)太郎が買ったよ、自転車を。

(18)[_{s1} 太郎が[] 買ったよ]、[_{s2} 自転車を_i [~~太郎が~~も買ったよ]]

(cf. Tanaka 2001)

(18)において、後置文は 2 つの文 S1,S2 から構成される。3.1 節で、後置文は、語用的に、話者がまず言いたい内容を発話し、その発話に関係のある要素が後ろに付加した結果と考えられることを述べた。すなわち、前置要素に相当する S1 は、S1 の発話時点で話者の頭の中にあるものの、まず言いたいことから外れた情報がゼロ代名詞として含まれ、後置要素に相当する S2 では、S1 で述べなかった情報が付加されると考える。そして、S2 は S1 を antecedent とする構造的・意味的にパラレルな文[太郎が自転車を買ったよ]から移動と削除により生成される。

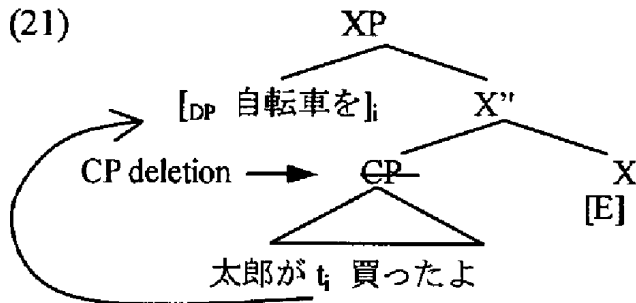
ところで、Fragment は Question に対する Answer であり、その点で、Merchant (2004)は、(16)における機能範疇 FP は Focus 句と考えてよい、としている。一方、後置文は、前述したように語用の観点から、S1 でまず言いたいことを発話し、そこで述べられなかった情報を S2 で付加した結果と考えられることから、後置要素は Focus とは別の意味機能を持つ機能範疇に含まれると考える。このことは、後置文では疑問辞や感嘆辞が後置されないことから言える。

³ 英語の Fragment には島の制約が見られるが、この点について、日本語の後置文の場合には違いがあることを 4.4 節で示す。

- (19)a. 太郎は何を食べたの ↑
 b. 何を太郎は食べたの ↑
 c. *太郎は食べたの ↑ 何を。

- (20)a. 太郎は何て強いんだ！
 b. 何て太郎は強いんだ！
 c. *太郎は強いんだ、何て！

本稿では、日本語の後置文を話者の強い伝達・発話の意図を示す一種の強調構文と捉え、前置要素の文末に現れる「よ」「だ」など話者のモーダル要素を CP の主要部とし、CP の上に更に、focus とは異なる意味的機能を持つ機能範疇 XP が構造上存在すると仮定する(cf. Ishihara 2000)。従って、後置文(18)の後置要素 S2 は(21)のように分析される。(21)において、「自転車を」は機能範疇 XP の主要部に位置する[E]素性により機能範疇 XP の指定部に移動し、補部である CP が S1 との構造的・意味的平行性により削除される(Lobeck 1990, Saito and Murasugi 1990)。



4. 本提案に基づく日本語の後置文の分析

4.1 残余代名詞

2.3 節で後置文は残余代名詞を許すことを見たが、本提案では、例文(7c)は(22)のように分析される。

- (7) c. 太郎が彼女を_i殴ったんだ、花子を_{i_o}。

- (22)[S₁ 太郎が彼女を_i殴ったんだ]、
 [S₂ 花子を_i [~~CP~~ 太郎が_i 殴ったんだ]]

(22)において、S2はS1を antecedent とする構造的・意味的に平行な文[太郎が花子を殴ったんだ]から移動と削除により生成される。このように、本提案の分析により、後置文が残余代名詞を許すことをうまく説明できる。

4.2 修飾語句

2.1 節で、左方移動文である(2b)は(2a)の名詞の修飾語だけが左方向に移動して非文となるが、同じ要素が右方向に移動しているように見える(2c)は文法的であることを見た。本提案では(2c)は(23)のように分析される。

- (2) a. タベ 駅前で 山田君の自転車が盗まれたんだ。
b.*山田君の タベ 駅前で 自転車が盗まれたんだ。
c. タベ 駅前で 自転車が盗まれたんだ、山田君の。

- (23) [S₁ タベ、駅前で[]自転車が盗まれたんだ]、
[S₂ 山田君の[CP-タベ、駅前で[t 自転車]が盗まれたんだ]]。

ところで、(23)の S2 において、「山田君の」が左方へ移動していると考え、名詞句の修飾語の取出しによる島の制約により非文となることを予測するが、事実は異なる。(2c)が文法的であることは、「山田君の」が単純な移動によるものではないことを示している⁴⁵。ここでは、(2c)は(24)に示すように、S2 において島の制約を破った結果現れる trace (*t)

⁴ 例文(2c)において、「山田君の」の「の」が代名詞の「の」であるという解釈も考えられる。しかし、代名詞の「の」は具象名詞にのみ代用され、抽象名詞の代用として使われることはない(神尾 1983)。一方、次の例に示されるように、後置要素では、抽象名詞を修飾する属格も生起しうる。従って、「山田君の」の「の」は代名詞の「の」ではないと言える。

- i) a.最近、高橋選手のオリンピックに対する意気込みは物凄いね。
b.*?高橋選手の 最近、オリンピックに対する意気込みは物凄いね。
c. 最近、オリンピックに対する意気込みは物凄いね、高橋選手の。

⁵ 例文(2c)において、「山田君の」だけでなく、「山田君の自転車が」全体が移動した後、「自転車が」が削除されたとすれば、島の制約の問題はなくなる(上山あゆみ氏からの指摘)が、その場合、S2とS1の平行な構造的・意味的關係が失われてしまう。島の制約に関する問題は、4.4 節の關係節からの取り出しの問題も含め、更なる検討を要する。

が、CP が削除されたことによりなくなってしまうため文法的になる (island repair) と考える⁶ (Lasnik 2001, Merchant 2004)。

(24) [s₁ タベ、駅前で[]自転車が盗まれたんだ]、

[s₂ 山田君の[cp ~~*t~~ タベ、駅前で[t 自転車]が盗まれたんだ]]。

4.3 副詞

2.2 節で、従属節内から副詞が右方向に取り出されると、従属節を修飾する解釈がしにくくなることを見た。

(6) a. 僕は太郎が理由もなく会社を辞めたと信じていたよ。

b. 理由もなく 僕は太郎が会社を辞めたと信じていたよ。

c. *僕は太郎が会社を辞めたと信じていたよ、理由もなく。

(cf. Tanaka 2001)

本稿での提案では(6c)は(25)のように分析され、「理由もなく」は主文の「信じていた」と従属節の「会社を辞めた」のどちらを修飾する解釈も可能であるはずである。しかし、事実は主文の「信じていた」を修飾する解釈のみが可能である。

(25) [s₁ 僕は太郎が会社を辞めたと信じていたよ]、

[s₂ 理由もなく [cp ~~僕は太郎が~~ ~~t~~ 会社を辞めたと信じていたよ]]

⁶ Merchant(2004)では、Fragment は島の制約を受けるとしているが、i)のように、island repair が起きていると考えられる例もある。

i)Q: Whose car did you take? (Merchant 2004)

a. John's.

b. *John.

一方、Sluicing において、wh 句を関係節内から CP 指定部に移動した後、TP を削除すると、次の i) に示すように島の制約がなくなる (Merchant 2004)。

ii) a. *They want to hire someone who speaks a Balkan language, but I don't remember which (Balkan language) they want to hire someone [who speaks _].

b. They want to hire someone who speaks a Balkan language, but I don't remember which [~~wh~~ Balkan language] they want to hire someone [who speaks _].

この Sluicing による island repair 現象は、iii) に示すように、名詞を修飾する形容詞を移動した場合にも見られる (Merchant 2004) ことから、日本語の後置文は island repair を起こすという点で、Sluicing 的振舞いをするとも考えられる。

iii) a. *She bought a big car, but I don't know how big she bought [a _ car].

ここでは、この副詞の解釈は、後置文が主文としてしか存在しないことに起因した現象として再分析できることを提案する。すなわち、従属節から後置要素が取り出されたとき、linear に、より近い主文と結びついた解釈が成立してしまうと、従属節との結びつきができなくなると考える。

このような linear に、より近いものと結びついた解釈が成立しやすいという現象は次の例文から裏付けられる。

(26)僕は信じていたよ、太郎が会社を辞めたと、理由もなく。

例文(26)は一旦従属節全体を取り出した後、副詞「理由もなく」を再度取り出した多重後置となっているが、この場合、副詞「理由もなく」は従属節を修飾する解釈が可能になる。これはすなわち、従属節を主文から取り出したことにより、副詞が linear に、より近く位置することになったことにより、可能になったと言えよう。

4.4 島の制約

4.2 節で、名詞句の修飾語が後置要素となれることから、島の制約を破った結果現れる trace (*t)は、削除されれば文法性に問題がなくなるという island repair の分析を提示した。その分析が正しければ、関係節内から間接目的語を取り出した下記(27b)は(28)のように分析され、従って、島の制約を破った結果現れる trace (*t)も削除されることから、文法的になることを予測する。しかし、実際には(27b)は非文である。

(27)a. ジョンがメアリがその男に貸した本を盗んだよ。

b. *ジョンがメアリが貸した本を盗んだよ、その男に。

(cf. Tanaka 2001)

(28) [s₁ ジョンがメアリが[]貸した本を盗んだよ]、

[s₂ その男に[_{CP} *~~t~~ジョンが [メアリが t 貸した] 本を盗んだよ]]。

b. She bought a big car, but I don't know how big [_{CP} she bought [_S car]].

以下では、(27b)の文の悪さは、実は、島の制約違反によるものではなく、やはり後置文が主文としてしか存在しないことに起因した現象として再分析できる可能性を提示する。

先ず、(27b)のような文の文法性だが、似たような構造であっても、取り出される要素の文法関係によって文法性が異なる。すなわち、(27b)では間接目的語が取り出されているが、以下の(29b)のように、theme である直接目的語の「その本を」を後置した場合、(29b)は(27b)程悪くないように思える。

(29)a. ジョンがメアリがその本を貸した男を呼び出したよ。

b. ??ジョンがメアリが貸した男を呼び出したよ、その本を。

下記例文(30)では、後置要素が項要素であるか、後置詞句であるかで文法性が異なることを示している。

(30)a. 警察が[その店で出刃包丁を買った]男を逮捕したらしいよ。

b. ??警察が[その店で買った]男を逮捕したらしいよ、出刃包丁を。

c. *警察が[出刃包丁を買った]男を逮捕したらしいよ、その店で。

これらの文法性の違いは、後置文が主文現象であることに起因するものと考えるところで説明がつく。たとえば(30c)が非文であるのは、後置要素が linear に、より近い主文と結びついた解釈が、(30a)本来の解釈と異なるためである⁷。後置詞句や4.3節で見た副詞のように、付加詞が後置された場合は、linear に近い主文と結びついた解釈になりやすいと思われる。一方、theme のように動詞との結びつきが強い語句（項要素）が後置されている(30b)では、主文の動詞には theme 「その店で買った男を」があるため主文としての解釈ができず、従属文としての解釈が可能にな

⁷ 以下の例文の非文法性は、後置要素が後置詞句である場合は、意味的に従属節に結びつくべき要素であっても、linear により近い位置にある主文と結びついた解釈になりやすいことを示している。

i) *警察が[出刃包丁を買った]男を逮捕したらしいよ、5,000円で。(宗像孝氏の指摘)

ii) *警察が[出刃包丁を買った]男をコンビニで逮捕したらしいよ、その店で。(佐野まさき氏の指摘)

るため、非文法性が軽減されると考えられる。これは、下記のように主文に本動詞が含まれない場合、文法性がより増すことから確かめられる。

(31)a.あれが[昨日犯人が出刃包丁を買った]店だよ。

b.?あれが[昨日犯人が買った]店だよ、出刃包丁を。

以上の事実から、日本語の後置文には *island repair* があるものの、後置要素が従属節から取り出された場合は、*linear* な解釈が文法性を左右するものとする。この分析が正しければ、前述の、関係節(27a)からの名詞句「その男に」の取り出しも、関係節「メアリが貸した本」と *linear* に近い位置にあれば、文法性が増すことが予測される。これは(32)のように、一度関係節全体を後置した後に、名詞句「その男に」を後置すると文法性が増すことから確かめられる。

(27)a.ジョンがメアリがその男に貸した本を盗んだよ。

b.*ジョンがメアリが貸した本を盗んだよ、その男に。

(cf. Tanaka 2001)

(32)?ジョンが盗んだよ、メアリが貸した本を、その男に。

先に、日本語の後置文は、2文(S1,S2)から成り立ち、S2に相当する後置要素は文の一部(断片)であって、かつ、S1に相当する前置要素と関係のある要素が付加された文である、との分析を示した。これまでに見た現象は、本来は別々の文要素であった前置要素と後置要素(断片)が、解釈の段階であたかも新しい一つの主文としての振舞いを見せることを示している。そして、その後置要素(断片)が副詞や後置詞句のような付加詞の場合は特に、それに先行する、*linear* に近い前置要素と結びつきやすいことが示唆された。逆に言えば、後置要素(断片)と前置要素との主文としての解釈が元の文の解釈と同じになる場合のみ、文法性が増すと言えよう。

4.5 Linearity

前節では、関係節からの取り出しを例に、本来は別々の文要素であった前置要素と後置要素の linear な関係が、あたかも新しい一つの主文としての振舞いをしていることを見た。この現象は多重後置文の場合にも観察される。

まず、以下に示すように、従属節内の名詞句を後置することは可能である。

- (33)a. 太郎が 花子がパソコンを買ったと 言ってたよ。
b. 太郎が 花子を買ったと 言ってたよ、パソコンを。

これは、(33)では、theme のように動詞との結びつきが強い名詞句が後置されているため、主文の動詞「言ってた」と結びついた解釈ができず、従属節としての解釈が可能になるためであると考えられる。

一方、以下の例文(34)では、theme である名詞句「上着を」が後置されているが、従属節「太郎が [] 脱ぐと」とそこから取り出された名詞句「上着を」が linear に近い位置にあると文法的である(34c)のに対し、(34b)のように、間に主文が挟まると非文となる。(34b)では、「上着を」と linear に近い位置にある主文の動詞「渡した」とが意味的に結びつき可能であるにも関わらず、主文にも theme 「ハンガーを」が存在するため、干渉を起こして解釈が困難になり、非文となると考えられる。特に、(34b)のように間に挟まった主文が長く、本来結びつくべき従属節が位置的に遠いと、解釈が困難になると思われる(cf. Simon 1989)。一方、(34c)は一旦従属節全体を後置した後、さらに名詞句「上着を」を後置した多重後置になっており、この場合、後置された名詞句「上着を」と従属節の動詞「脱ぐ」とが linear に近い位置にあるため、解釈上の困難が発生せず、文法的になる。(34d)のように従属節内での後置は許されないことを考えると、(34c)では、本来は従属節であった「太郎が [] 脱ぐと」と「上着を」とが、あたかも一つの新たな主文のような振る舞いをしていると言えよう。

- (34)a. 太郎が上着を脱ぐと、花子が彼にハンガーを渡したよ。
 b. *太郎が脱ぐと、花子が彼にハンガーを渡したよ、上着を。
 c. 花子が彼にハンガーを渡したよ、太郎が脱ぐと、上着を。
 d. *太郎が脱ぐと、上着を 花子が彼にハンガーを渡したよ。

最後に、後置文における linear な関係が、数量詞の作用域において c-command 関係の如く解釈に影響を及ぼす可能性があることを示唆する例文を示す。

下記の例文において、(35a)は本提案では(35b)のようになり、数量詞の解釈は(35a)と同じになることを予測し、事実と異なる。しかし、ここで、これまで見てきた前置要素と後置要素の linear な関係からくる新たな主文としての振る舞いに着目すると、(35b)における every>some の解釈は前置要素「どの」と後置要素「誰か」の linear order から生じていると考えられる。

(35)a. 誰かがどの本も捨てちゃったよ。(some>every, *every>some)

b. []どの本も捨てちゃったよ、誰かが [~~cp~~ どの本も捨てちゃったよ]。
 (some>every, every>some)

(36)a. どの本も誰かが捨てちゃったよ。(some>every, every>some)

b. 誰かが []捨てちゃったよ、どの本も [~~cp~~ 誰かが t 捨てちゃったよ]。
 (some>every, every>some)

5. まとめ

日本語の後置文について、左方移動文との相違に焦点を当て、語用の観点も視野に入れた分析を試み、以下を論じた。

1. 後置文は移動ではなく、2つの文、S1 と S2 から構成され、右方に移動しているように見える要素は文の一部（断片）である。
2. 英語の Fragment と振る舞いが似ているため、Merchant (2004)を援用すると、後置要素 (S2) は意味的に前置要素 (S1) と構造的・意味的にパラレルな文から移動と削除の結果、派生されると分析できる。

ただし、日本語の後置文には *island repair* が見られる。従属節からの取り出しで島の制約が見られる場合は、主文との *linear* な *order* による干渉に起因する。

3. 後置要素が含まれる機能範疇は、語用的観点から *Focus* 句とは異なる意味的機能を持つ。
4. 後置文は、本来は別々の文から成っているものの、解釈の段階で文の断片である後置要素 (S2) と *linear* に近い前置要素 (S1) とがあたかも新しい一つの主文としての振舞いをする。
5. 前置要素 (S1) と後置要素 (S2) の *linear* 関係が、数量詞の解釈にあたかも *c-command* 関係の如く影響を及ぼす。

後置文は日本語の話し言葉において、頻繁に見られる現象である。しかし、語用的要素が深く関わっているためか、従来、統語理論と語用論の枠組みの中で別々に扱われてきた感がある。本稿では、両者を統合的に扱うことにより、後置文の生成における我々人間の認知・言語システムのより深い理解が可能になることを示唆した。日本語の後置文の現象を更に分析するとともに、他言語の後置文を分析することが今後の課題である。

謝辞

本稿の執筆にあたって井上和子、長谷川信子両氏、及び井上ゼミ各位から有益なコメントを頂いた。また、ワークショップにおいて、参加者各位からも有益なご助言を頂いた。ご教示いただいた点をすべて本稿に反映させることはできなかったが、今後の研究に役立てたい。ここに記して感謝申し上げます。

参考文献

- Abe, Jun. 1999. On Directionality of Movement: A Case of Japanese Right Dislocation. ms. Nagoya Univ.
Endo, Yoshio. 1996. Right Dislocation. *MIT Working Papers in*

Linguistics 29, 1-20.

- Haraguchi, Shosuke. 1973. Remarks on Dislocation in Japanese. ms. MIT.
- 井上和子. 1978. 『日本語の文法規則』大修館書店.
- Ishihara, Shin'ichiro. 2000. Stress, Focus, and Scrambling in Japanese. *MIT Working Papers in Linguistics* 39, 142-175
- 神尾昭雄. 1983. 「名詞句の構造」井上和子『日本語の基本構造』77-126. 三省堂.
- 久野暉. 1978. 『談話の文法』大修館書店.
- 黒木暁人. 2005. 「日本語の右方転移構文と左方移動分析」日本言語学会. 第131回大会予稿集. 314-319.
- Lasnik, Howard. 2001. When Can You Save a Structure by Destroying It? *NELS* 31. 301-320.
- Lobeck, Anne C. 1990. Functional Heads as Proper Governors, *NELS* 20, 348-362.
- Merchant, Jason. 2001. *The Syntax of Silence*. Oxford.
- _____. 2004. Fragments and ellipsis. *Linguistics and Philosophy* 27.6:661-738.
- Saito, Mamoru. 1985. Some Asymmetries in Japanese and Their Theoretical Implications. Doctoral dissertation, MIT.
- _____. 1992. Long Distance Scrambling in Japanese. *JEAL* 1, 69-118.
- Saito, M. and K. Murasugi. 1990. N'-Deletion in Japanese: A Preliminary Study, *Japanese/Korean Linguistics* 1, 285-301.
- Simon, M. E. 1989. *An Analysis of the Postposing Construction in Japanese*. Doctoral dissertation, University of Michigan.
- 高見健一. 1998. 「語用と後置文」神尾・高見. 『談話と語用』114-203. 研究社.
- Tanaka, Hidekazu. 2001. Right-Dislocation as scrambling. *J.Linguistics* 37, 551-579.
- 綿貫啓子. 2006. 「情報構造からみた日本語倒置文の機能」(To appear) 社会言語科学会研究大会予稿集.

261-0014

千葉県千葉市美浜区若葉 1-4-1

神田外語大学

言語科学研究センター

FZW03563@nifty.com